

# 専門以外にも関心を広げて

自由の森学園には「進路の日」という一日があります。卒業生が来校し、進路選択したきっかけや現在の仕事について語る時間です。生きる方向性を選択しようとしている高校生にとって、少し先を歩いているとはいえ同じ途上にある卒業生の言葉には伝わるものがあります。

今年も4人の卒業生が高校生3年生に向けて語りました。全員20代です。ガラス工芸作家のI君、獣医師のY君、体育教師のMさん、法学部4年生で法律家志望のSさんです。

それぞれ在校時の活動と進路を選んだきっかけについて話します。I君は中学2年生からガラス細工部に加わり、作品を友人にあげた時に「ありがとう」と喜んでもらえたことから、これを喜びにして生きていきたい

## 進路の選択

## はぐくむ

と考えるようになったと言います。Y君は、長期休みに参加した酪農などの体験学習がきっかけでした。ピアノや合気道などの経験が職業選択のバックボーンとなったと語ります。

Mさんは5歳年下の弟の友達と遊ぶことが多く、小さい子どもと関わるのが好きだと気づいたとのこと。Sさんはたくさんの興味の中、中学3年時に死刑に関する本を読んで、法の世界に入ってみたいと考えたそうです。それぞれ偶然やりたいことを見つけたのではなく、日常の学びや生活の中から大事なきっかけが浮かび上がってきたことが伝わります。

興味を引いたのは、進路を切り開く過程で、幅を広げるためにあえて専門外のものに向き合っていることです。

ガラスが好きすぎてガラスしか見えなくなっていたと語るI君は、これではいけないと大学では漆を専攻しました。法律家になるために法科大学院に進もうとしているSさんは、法学は大学院でやるし、法学だけだと頭の硬い人になってしまいそうと、大学ではむしろ物理学や天文学、経済学などに関心を広げていったそうです。

一般に、高校の進路指導では早くやりたいことを決めて効率よく準備することが大事だと教えがちです。寄り道はできるだけ避けるべきだと考えられています。しかし、社会が多様化、流動化している現代では専門だけを追うより、むしろ裾野に広く根を張っていくことが重要なのではないかと感じます。それを自分で選択できる感性をどう培っていくのが課題です。

自由の森学園理事長

鬼沢真之